

東日本大震災の経験を今後活かすために

名取第二中学校（現高校1年生） 藤野 慎也

2011年3月11日14時46分、信じられない程の大きな地震が日本列島を襲った。その地震は、後に、東日本大震災と名付けられる。この地震のマグニチュードは9.0、最大震度は宮城県の栗原市で震度7を記録した。私が住んでいる名取市でも、震度6弱を記録し、私自身も恐ろしい経験をした。マグニチュード9.0というのは、国内で観測史上最大、世界的にみても歴代4位に入る程のとてつもなく巨大な地震だったのだ。

この地震は、広い地域に、そして多くの人々の心に大きな傷跡を残していった。東北地方の大部分は停電し、ガスや水道などのライフラインが止まり、今まで送っていたような生活が全く出来ない状態がしばらく続いた。

東北地方だけではない。千葉県では、石油タンクが大爆発してしまい、高さ数十メートルもの火柱が上がったそうだ。それに、埋め立て地では、液状化現象といって、地面がゆるみ、水が溢れ出てくる現象まで起こっていた。

今挙げたものだけでもとても大変な状況だが、やはり何といても一番酷い状況だったのは、太平洋側の沿岸部だろう。

震源が海底の地震の場合、津波が発生する。そして、地殻変動が大きい程津波が大きくなる。今回の地震は、揺れはもちろん大きかった。津波も来ると多くの人がすぐに予想出来ただろう。しかし、まさかあんなに大きな津波が来るとまでは、みな予想出来なかったのではないだろうか。なぜなら、大きな津波が来る、と予想していたならば、人は家に荷物などを取りにわざわざ戻って来たりすることはなかったはずだからである。

逃げ切れずに津波に飲まれてしまった人もたくさんいる。一度家に戻ってしまったがために、津波が来てしまったという人もいる。そして、指定されていた避難場所に行ったのにもかかわらず津波に飲まれた、という人達までもいる。つまり、これまでやってきた避難訓練といったものは全く役に立たなかったということではないか。普通の人ならば、訓練通りにやっていたら大丈夫だと思ってしまっただろう。だが、今回は違った。訓練通りにやっていた人達もが亡くなってしまったのである。なぜか。それは訓練が甘かったのではないかと思う。もっと質の良い訓練をしていれば、もっと大きな、大変な事態を想定した訓練をしていれば、被害は少なくなっていたかもしれない。宮城県沖地震ならば、最大でもこれぐらいの大きさだろうから、こう対応すればいい、これを作っておけば大丈夫だろう、というのは確かに素晴らしいことだ。しかし、日本は地震のとても多い地震大国なのだから、もっと慎重に、そして出来るだけ正確に、それらを見極めていく必要があったのだろうと私は考える。

私達は、今回の地震で、今まで以上に地震の恐ろしさや津波の恐ろしさ、自然の恐ろしさといったものを再確認出来たのではないだろうか。この出来事で、私達は、災害の対処については確かに成長することが出来たと思う。いや、成長しなければならない。「分かっている

つもり」を、「分かった」に変えなければならない時なのだ。

団体行動の難しさや大切さ、思いやりの心を持つことの大切さ、人は一人ではたいしたことが出来ない、ということなど、たくさんのことを今回の地震は教えてくれた。そして、このことは将来、再び役に立つ時が来るかもしれない。その時私達が一体何をすることが出来るだろうか。先程も言ったが、人は一人ではたいしたことは出来ない。つまり、全ての人が今回の地震の事から目を背けずに、今後もこの日本国がどのような対応をしてゆくのかを見守り、そして忘れず、また同じような状況になってしまった時、これまで蓄えてきた知識を十分に活かして、最善の対応をしていかなければならないはずである。

自分の手が届かない所まで手を差し伸べる必要はない。自分の手が届く範囲でいいから、手を差し伸べることが何よりも大切だろう。全ての人がこの手を差し伸べることが出来た時、日本は、日本国民はつながれる。どんなことにも負けないくらい強くなれる。そのこと今、皆に伝えたい。